

第2章

若者のやる気アップ

YARU



1 次世代サミットの実施 ～若者による社会づくりと交流～

若者が社会参加を諦めてしまう要因の一つとして、この社会が大人によるものだと思い込み、自分自身には権利がないと勘違いしてしまうことがあげられます。

社会への参加と地域への愛情を育むため、若者が主体となるサミットを開催し、県への施策を提案していくことで、自分自身の意見や考えを発表し、さまざまな立場の人と交流をする場をつくります。

これにより、若者に社会参加の権利があることを知らせ、交流を通して手を取り合い、平和的なやり方で課題に向き合っていくことを学ぶことができると思います。また、自分達の意見を県の施策に提案することで、達成感や必要性を感じることもできます。こうした議論があってこそ、若者たちは議会や政治のあるべき姿を理解していくのではないのでしょうか。

若者は大人が用意した「楽な道」よりも、多少難しくても友達や周囲の人たちを支えとして、自ら「困難な道」を乗り越える力を持っています。そこで、若者が主体となった施策の実施に向けて、若者を信頼し、意見を取り入れることができるシステムをつくる必要があると考えます。

<県には・・・>

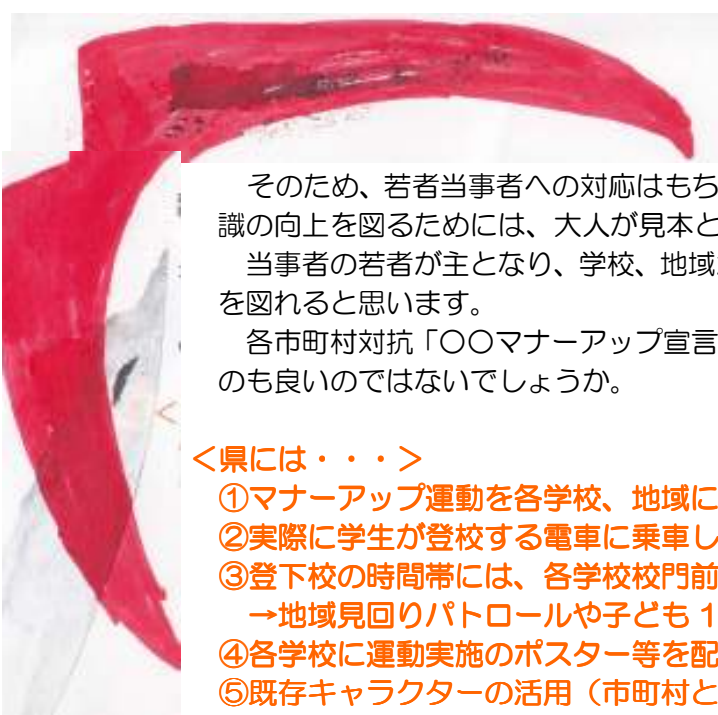
- ① 「子どもの権利条約」を県民全体に周知。
- ② 次世代サミットメンバーを募集し、月1回ほどの定例会を開催。
→次世代サミットのシステム、問題提起から施策の提案までをバックアップ。(場所の提供や施策提案に関する相談受付など)
- ③ 必要に応じて、県から次世代サミットへ施策提案を投げかける。
- ④ 次世代サミットをフェイスブックシステムネットワークに組み込む。
- ⑤ 老人、幼児、県下の留学生など普段あまり接することのないさまざまな人たちと意見交換交流会を開催。



2 若者のマナーアップ運動の実施

自転車の2人乗り、信号無視、携帯をいじりながらの自転車の運転、服装の乱れ、ゴミのポイ捨て、列車や公共施設の中で騒ぐ、コンビニ前で地べたに座り食べる・・・などの若者の姿をさまざまな場所で見かけます。

若者のマナー低下については、当事者の意識ももちろんですが、その手本となるべき大人のマナー低下も要因の一つとして考えられるのではないのでしょうか。



そのため、若者当事者への対応はもちろん、その手本となるべき大人のマナーアップにも併せて取り組んでいく必要があると思います。若者の意識の向上を図るためには、大人が見本となり、若者と一緒にあいさつ・声かけなどを実施し、若者の意識の醸成を図ることが大切です。

当事者の若者が主となり、学校、地域が連携してマナーアップを呼掛けるなどのマナーアップ運動に取り組むことで、若者も大人もマナーアップを図れると思います。

各市町村対抗「〇〇マナーアップ宣言」を地元ゆるキャラを使って宣言してもらい、クリアファイルやタオルなど実用的なものに印刷し広報するのも良いのではないのでしょうか。

<県には・・・>

- ①マナーアップ運動を各学校、地域に呼びかけ（マナーアップ運動に協力してくれる団体等）
- ②実際に学生が登校する電車に乗車し、マナー指導等を実施
- ③登下校の時間帯には、各学校校門前等であいさつ運動及び服装、マナーを指導
→地域見回りパトロールや子ども110番の方にも呼掛けてみてはどうでしょうか。
- ④各学校に運動実施のポスター等を配布
- ⑤既存キャラクターの活用（市町村とも連携し、キャラクターなどを活用）
 - ・キャラクターを使用したポスターの作成
 - ・キャラクターのマナーアップ運動への参加（ポスター配布など）



3 ドリームギフトプロジェクト

文部科学省のHPでも社会環境の変化と徳育に関する今日的課題として、「日本の若者・子どもたちが、諸外国と比べて「自尊感情」が低く、将来への夢を描けないという指摘もある。」ように、今の若者にとって夢を描くのは難しいことなのかもしれません。

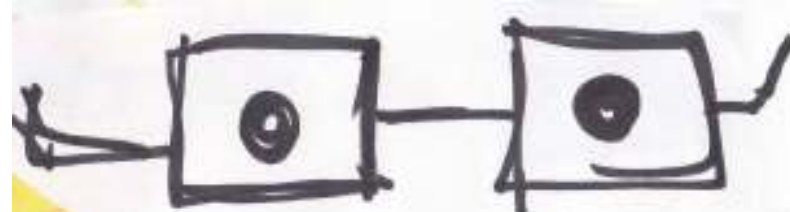
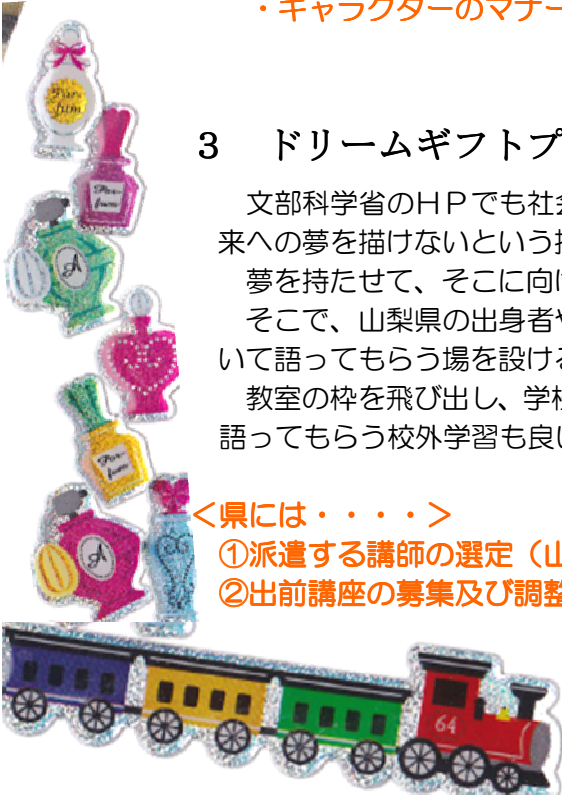
夢を持たせて、そこに向けて頑張る若者を育成していくことも「若者の健全育成への取り組み」として必要なことではないのでしょうか。

そこで、山梨県の出身者や、現在山梨県内で活躍している方たちを若者が集まる場に派遣し（出前講座など）、自分達のやりがいや生きがいについて語ってもらう場を設けることで、若者が将来の夢を描きやすくなるのではないかと考えます。

教室の枠を飛び出し、学校にはない専門的な機材が置いてある場所で実際に働いている人に、その職業のこと、その職業に就くまでの経緯などを語ってもらう校外学習も良いのではないのでしょうか。

<県には・・・>

- ①派遣する講師の選定（山梨県出身者または県内で活躍している方）
- ②出前講座の募集及び調整



第3章

大人の意識チェンジ

若者は、社会の空気に敏感で、大人社会の漠然とした不安や希望のなさに不安定になり、気持ちがいらつくことがあると思います。若者は社会を映す鏡のようなものであり、若者の抱える問題は大人社会の反映でもあります。

そのため、子どもや若者が不安を感じず、将来に少しでも希望をもって暮らせるようにするために、大人自身の意識改革も非常に重要になってきます。

また、家庭においても忙しすぎる大人やシングルで子育てをする人が増え、親に代わって祖父母が子育てをすることも多くなっています。単純に親だけの頑張りでは追いつかないこともあるため、親に代わる人、家庭に代わる地域が、しっかりと子育てから成人するまでをサポートできる社会になっていかなければなりません。そのためには、「愛情を持って叱れる大人」、「理解し、ありのままを受け止められる大人」を増やしていく必要があります。

1. 親向け学習機会の提供

思春期の子どもは『反抗期で不安定で扱いにくい年頃』と感じている大人も多いのではないのでしょうか。大人にとってのちょっと前の当たり前はもう当たり前ではないから、対処法がわからなくてとまどうのだと思います。

最近子どもとコミュニケーションがとれないと悩んでいる親、地域のおせっかいおばちゃんおじちゃんになろうとしている人、将来、教育・福祉に関わる職業を目指す学生・社会人。このようなすべての大人に向けて、現実に関わっている若者が抱えている問題や、若者の考え方、行動について知ってもらい、どう接すればよいのかを学ぶ機会が必要だと思います。

また、子ども若者支援に関わる団体など既に若者たちに関心を持ち、少しでも力になり、支えていきたいと思っている大人をより多く掘り起こし、さらにレベルアップを図るための機会も併せて必要だと思います。

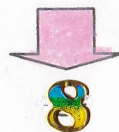
このようなさまざまな人たちが、自分の目的にあわせて気軽な知識習得から本格的な学習内容まで、バラエティ豊かに学べるセミナーや講座、講演会を展開します。

これをきっかけとして、不安定な時期を迎えた若者をしっかりと受け止めることのできる大人を増やすことで、地域社会で青年期の子どもたちを支えることができるのではないのでしょうか。

<県には・・・>

○親向け講座・セミナー等の開催

- ①参加者の募集 ※広報を幅広く行う（児童委員、自治会、教育委員、市町村など）
- ②講師の選定・紹介（地域で講座、セミナーを開催したい！という相談があった場合など）



◆内容イメージ

○興味のある講座のみの参加でOK

→地域の講座を聞きたい人が、興味を持ったら気軽に参加できるイメージ

○講演会の開催（テーマ：①今の若者の現状を教えて！

②どうしたら上手に叱れるか。他人の子どもを叱るときにはどうすれば良いのか

③ありのままの姿を受け止められる大人になるには など

◆参加者イメージ

○子ども若者支援に関わる団体など既に若者たちに関心を持ち、少しでも力になり、支えていきたいと思っている大人であれば可

（祖父母世代（ことぶき勤学院など）、育成会の指導者、スポーツ少年団の指導者、PTAなど幅広く周知を図る！）

◆講座の内容はさまざま

例えば・・・

- ①健康 「妊娠出産のリスク」「若者うつ病」「急激に増加している発達障害」
- ②学習 「世代を超えたSNSとデメリット」「不登校のメカニズム」「子どものつまずきを把握」
- ③労働 「面接」「労働基準法」
- ④セーフティネット「奨学金、就学援助、母子貸し付け、命の電話、かるがも・・・」
- ⑤虐待 「しつけと虐待の定義」
- ⑥法律 「少年法」「子どもの人権」
- ⑦心理 「思春期入門」

◆出前講座の実施

地域等において各団体が開催する研修、イベントなどと連携
幅広い人たちに講座を聞いてもらえる工夫



※行く行くはこんなこともできると良いのではないのでしょうか。

①講座の受講状況を YOUTUBE で流し、広く県民にPR

②中央高校（困難な状況で学習している青年たち）や生涯学習センターなどでの開催

→大人も青年たちも相互に学習意欲の向上につながる

③受講動機（レベル）に基づき、年1回受講者の学んだことの発表会の開催と認定証の交付

入門：今の若者の現状を教えて！学びなおし



中級：おせっかいおばちゃんおじちゃん 地域で悩める人をフォローしたい個人や団体

上級：子ども若者 Happy コーディネーター（若者支援コーディネーター）の資格取得

*一定の割合（〇割以上）の参加は必須

*単元ごとにレポート提出

*NPO、ボランティア団体の体験

*イベントの企画、開催

*終了者には認定証

④人材バンクに登録し、地域、学校、企業等に情報提供を行う（各種講演会等への推薦）

⑤認定されて登録した人の活動報告を授業に取り入れる。

⑥居場所づくりで事務局になった団体は、この人材を必要としている方と登録者との仲をコーディネートして活用を促進する。

◆人材バンクに登録

若者に関する団体やNPOへOJC研修(OJT トレーナー研修)

各イベントへの参加(一定割合以上)

バンク登録者は自分の活動事例を次年度以降の講座で発表

◆「入門講座」への在宅学習の導入

「入門講座」の一環として、一般的な知識の習得を目的とし、TVを活用とした在宅学習の場を設けます。

例えば…

○育児サポート番組「子育て日記」の思春期前まで向けの番組をつくる（のびのび思春期など）

・現在のリアルタイムの思春期の心や体の発達についての知識情報だけではなく、思春期、若者を取り巻く環境、思春期の興味があることなど思春期に関連した内容を5～10分程度放送する。

・専門家を交えたり、親の悩みや相談コーナー、思春期の子育てが終わった親の過去の体験話が聞けるコーナーを設けたり、番組内容によっては視聴者も参加できるなど視聴者参加型の番組にする。

2. 家庭教育地域リーダーの育成

家庭教育は、子どもの「生きる力」を養い、能力を身につけていくために非常に重要です。

しかし、どんな親でもはじめから子どもの育て方、成長に応じた子どもとの関わり方を知っているわけではなく、完璧な親などいません。

そのため、家庭教育をただ各々の家庭に委ねるのではなく、これらを支援していく体制づくりが必要だと考えます。

今の社会は、核家族化、地域の希薄化などにより、親類関係や地域での関わりが弱くなっていると思います。このような中で、親子を孤立させないためにも、家庭を支援できる人材の育成が重要になります。

また、3.11以降「絆」ということが強く言われています。思春期に入ると、親子の会話も少なくなります。たわいのない会話の中から、子どもたちからの「SOS」をキャッチできることもあると思います。現代社会の中で時間に追われ、親も子も忙しい中で、たとえ短い時間でも時間をつくることは難しいかもしれませんが、小さい頃から安心できる雰囲気の中で家族との時間を過ごすことの大切さをもっと見直すことも必要だと思います。

<県には・・・>

- ①すでに育成した人材のフォローアップ等、地域で活躍している人材がチームとなって相談や発表会を開催
- ②家庭教育の重要性を伝える人材の養成
- ③リーダー取得者登録バンクとやまなし「親」学習プログラムの活用
- ④地域リーダーの対象を、就学前の子どもを持つ親から小中学生の親まで
- ⑤家庭で取り組んでいる好事例の紹介（HP等で）

例：家族で取り組む実践カレンダー作成・家族で一緒に朝食運動
家族の会話の推進（テレビを消す、本、新聞を読む）



3. 子育てに悩みを抱える親への応援

子育てをしていると、「子どもは順調に育っているのか」、「親としてこれで良いのか」「なかなかおむつがはずれない」などといった不安に襲われたり、孤独を感じたり、誰かに相談したいと感じることがあるのではないのでしょうか。子育てに悩みや不安を抱えている人は多いとは思いますが、実際には相談に踏み込めないという人もいるのではないかと思います。

さまざまな機関に子育てに関する相談は寄せられているとは思いますが、その内容には共通する部分も多いのではないかと思います。そこで、HPに代表例を掲載することで、相談に一步踏み出せない人も効果的に情報を得ることが可能になるのではないのでしょうか。

また、相談の手段について、電話は即対応ができるため便利ですが、「書く」ことにより気持ちの整理も可能になることから、メール・FAX・手紙などのあらゆる相談手段に対応できるようにすると良いと思います。

<県には・・・>

- ①子育て相談事例のHPへの掲載
- ②相談窓口を電話、メール、FAX、手紙などさまざまな方法で受け付けるとともに、幅広く周知する。